Osaka University Knowledge Archive

Title	Hamletにおける動物名の繰り返しと列挙の意味 : 翻訳で失われるメタファー義の問題、そして雲の場を中心に
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 15-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91578
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Hamlet における動物名の繰り返しと列挙の意味
翻訳で失われるメタファー義の問題、そして雲の場を中心に[1]

関西外国語大学（大阪大学名誉教授）渡辺秀樹

1 序

Caroline Spurgeon は名著 *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us.*において *Hamlet* に見られるイメージを 279 あげ、自然現象(Nature) 32、病気・医学(Sickness and Medicine) 20 などと大分類、動物(Animals) 27 では鳥、四足獣、爬虫類、昆虫、魚、空想と下位分類もしているが、不思議なことに 3 幕 2 場終わりの、所謂「雲の場」に出る camel, weasel, whale を採らず、劇中 3 度現れる mouse も、死の表象として本劇に重要な印象を与えているはずの蛆虫 (maggot / worm)への言及がないことにも疑問を持った[2]。不思議と言えば、歴代の群雄割拠 *Hamlet* 校訂テクストの中で、camel, weasel, whale の含意について何の注も付けていない Israel Gollancz, ed., Temple Shakespeare や大場建治版もある。これらは Dover Wilson, New Cambridge Shakespeare 版と並ぶ筆者愛読版である。何故これの動物名の意義が無視されているのか、これが本論執筆の直接動機である。

20 年ほど続けている「英語動物名の人間比喩の構造と歴史」という科研費共同研究において、日本語と英語での同種の動物名のメタファー義にかなりの相違があることがわかった。加えて、英語では別語が与えられてメタファー義も異なる 2 つの動物名が、日本語では同じ名前になることに日本人は気づきにくいこと、そして日本語訳ではそれらのメタファー義の相違も消えてしまうという翻訳上の問題を指摘せねばならない。

Shakespeare の動物名使用の作品ごとの有様、そしてその寓意的・隠喩的意味についての論考はあまたある。全てを読んで評価するのは筆者の時間・力量に余り、責務でもないと思うが、入手可能な研究書の幾つかと直接関係する論文は読んだ。最も詳しいのは Karen Raber, and Karen Edwards, 2022. *A Dictionary. The Arden Shakespeare Dictionary Series* の 1 冊 *Shakespeare and Animals* で、全作品に登場する動物名と関連語句がアルファベット順に解説されて、作品毎の動物名リストもあり、至便である。[3]

2 *Hamlet* に出現する動物名の特徴

戯曲 *Hamlet* はテキストが他作品より長いこともあるが、哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、虫など広範囲の動物名がメタファーとして使われて（60 余り）、動物名の出現数が少ない *King John* や *Julius Caesar*（ともに 23 個）などと対照的である。他劇にしばしば出現する serpent, wolf, worm のようなメタファー義が定まっている動物名に加え、数少ない bat, camel なども見られること、そして同じ種を表す類語の使用が複数見られることが特徴であろう。筆者が注目するのは、ほとんど全ての日本語訳で同じ訳語になっている「鳩」「蛆虫」「鼠」のメタファー義の相違と有名な雲の場（3 幕 2 場）の “camel, weasel, whale” の連結の意義である。

3 鳩　pigeon or dove

日本語で鳩となる名詞 pigeon と dove の両方が *Hamlet* に現れており、どの日本語訳でも「鳩」と

---

[1] 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）。本稿で取り上げた Hamlet からの引用は Jenkins ed. (1982) Arden Shakespeare を参照した。引用文中の太字表示は筆者のもの。

[2] Four-footed 9: dogs 2, porcupine, mole, donkey, ape, Hyrcanian tiger, tether, feed on moor. (1935, pp. 367-68.)

[3] *Hamlet* については adder, angling, animal, bait, Barbary, bat, beast, bug, camel, canker, capon, centaur, chameleon, crab, crocodile, crow, dog, dove, eyas, falcon, fish, fly, fox, frog, fur, glowworm, handsaw, hart, hobby-horse, honey, horse, human, jade, kite, lapwing, lion, maggot, mole, monster, owl, peacock, pearl, pelican, pigeon, porpentine, quill, rat, raven, roe, sable, satyr, serpent, shark, sheep, swine, tiger, venom, water-fly, weasel, whale, woodcock, worm (p. 450) と 63 個、総称名(animal, beast, fish)、種名 (lion, peacock)、縁語 (angling, bait)、空想動物 (satyr, centaur) が混じっている。Julius Caesar については Actaeon, adder, ape, ass, bait, bee, crow, dog, eagle, egg, ferret, hart, herd, hunt, kite, lion, raven, serpent, sheep, spaniel, unicorn, wasp, wolf (p. 451) の 23 個が書かれている。

訳出されている。まず、復讐を決行できない Hamlet の自己評価で自分は「俺は鳩みたいに意気地がなく（pigeon-liver'd）、あいつの暴虐を憤る勇気にも欠けている。でなければ、とうの昔にあの下衆野郎のはらわたを大空の鳶に食わせ、」（松岡和子訳）と猛禽の鳶（the region kites）と対比している。

> But I am **pigeon**-liver'd and lack gall
> To make oppression bitter, or ere this
> I should ha' fatted all the **region kites**
> With this slave's offal. Bloody, bawdy villain!
> Remorseless, treacherous, lecherous, kindless villain!
> （2 幕 2 場 572-552）

一方、名詞 dove は気のふれた Ophelia の歌う ballad の歌詞に「可愛い人」の意味で現れ、Hamlet に向けて言われているように聞こえる。

> They bore him barefac'd on the bier
> And in his grave rain'd many a tear—
> Fare you well, my **dove**. （4 幕 5 場 164-166）

Harold Jenkins は "Fare you well, my dove!" は Ophelia が ballad の歌詞に付け足した自分の台詞とみている。[4] この dove が、母 Gertrude の息子 Hamlet の評価では「みんな狂気のせい。しばらくは発作が続くけれどすぐ治まります。金色の双子の雛をかえそうとじっと卵を暖めている母鳩のように黙って坐り込んでしまうから」（松岡和子訳）のように「辛抱強い人」の意味の直喩で再出することはもっと注目してよいだろう。[5]

> This is mere madness,
> And thus a while the fit will work on him.
> Anon, as patient as the female **dove**
> When that her golden couplets are disclos'd,
> His silence will sit drooping. （5 幕 1 場 279-283）

Hamlet を dove に見立てているのは Ophelia と Gertrude で、自身では pigeon に比しているからだ。5 節の「鼠」に対応する rat と mouse の比較論考で、Claudius が Gertrude を "my mouse" と呼んでいるだろうと詰る Hamlet の言葉（3 幕 2 場）があるが、同じく endearment の動物表象でありながら、mouse は dove の清純なイメージに及ばない。

4 蛆虫　maggot or worm

「蛆」に相当する maggot が 2 度、worm が 3 度現れるが、第 2 例で近接して言い換えられているように pigeon と dove のような相違は感じられないし、差をつけて訳している日本語訳はない。

> For if the sun breed **maggots** in a dead dog, being a
> god kissing carrion—Have you a daughter? (2 幕 2 場 181-182)

> Not where he eats, but where he is eaten. A
> certain convocation of politic **worms** are e'en at him.
> Your **worm** is your only emperor for diet: we fat all

---

[4] "Printed by F[irst Folio] as though part of the song, and indistinguishable from it in Q2, but more plausibly an endearment added by Ophelia to it" (*Hamlet*, The Arden Shakespeare. 1982, p. 358)

[5] 多くの校訂版や訳本で Gertrude の台詞とされている部分を大場は Claudius の発言とし男言葉で訳しているのは興味深く、大場対訳・注解『ハムレット』で p. 316 の注は「Q2 では Gertrude の台詞」と記し、「凡例」(p. v)で「本選集のテキストは、基本的に 1623 年出版のシェイクスピア最初の戯曲集、通称第 1 二つ折り本 (First Folio, F1 と略記) 収録の本文を底本として、これの現代綴り化によって編纂された。」と記している。後掲図参照。

creatures else to fat us, and we fat ourselves for
maggots. Your fat king and your lean beggar is but
variable service—two dishes, but to one table. That's the end.
(4 幕 3 場 19-25)

Why, e'en so, and now my Lady **Worm's**, chapless,
and knocked about the mazard with a sexton's spade.
Here's fine revolution, and we had the trick to see't.
Did these bones cost no more the breeding but to play
at loggets with 'em? Mine ache to think on't. (5 幕 1 場 87-91)

名詞 worm は古英語では蛇や竜まで含み、爬虫類や昆虫など這って動く細長い生き物や寄生虫などを広く意味して使われていた（*Beowulf* では fire-dragon に使われている）。*OED* ではその中でも特に「ミミズ」と「蛆虫」を別項に分けて古英語以来の用例を並べている（3. a. A member of the genus Lumbricus; a slender, creeping, naked, limbless animal, usually brown or reddish, with a soft body divided into a series of segments; an earthworm. More widely, any annelid, terrestrial, aquatic, or marine. 6. a. (a) A maggot, or, in popular belief, an earthworm, supposed to eat dead bodies in the grave.）*OED* は「良心の呵責」の意の "worm of conscience" に *Richard the Third* から用例を引いている。

1597 Shakespeare *Richard III* i. iii. 219 The worme of conscience still begnaw thy soule.

Hamlet においては蛆虫自体を指しており、「良心の呵責」でも *OED* があげる人間メタファー義 II. 10. fig. a. A human being likened to a worm or reptile as an object of contempt, scorn, or pity; an abject, miserable creature. でもない。

OED の maggot には "maggots are worms" の意味の John of Trevisa からの引用や言い換えの意味の or に結ばれた "worms or maggots" が見える Oliver Goldsmith の引用もあり、*Hamlet* の 5 幕 1 場からも引用がある（下線は筆者）。

1495 *Trevisa's Bartholomeus De Proprietatibus Rerum* (de Worde) xviii. cxv. 856 Magottes ben wormes that brede of corrupt and rotyd moysture in flesshe.

1774 O. Goldsmith *Hist. Earth* VIII. 4 Caterpillars may be easily distinguished from worms or maggots, by the number of their feet.

人を意味するメタファー義は *OED* で 1. b. *figurative*. Used of parasitical people, pernicious influences, etc. と †3. A whimsical or capricious person. *Obsolete*. の 2 つが別に記されているが、初例は両方とも Shakespeare 死後の作品からである。以上から *Hamlet* においては maggot と worm は同じく蛆虫を意味して言い換えで用いられており、人のメタファーではない。2 幕 2 場で Hamlet は Polonius に向かって maggots を含む謎のような句を吐き、4 幕 3 場で Polonius はどこにいるのかと聞かれて、「今、蛆虫たちに食われている」と答えており、Polonius 関連で maggot と worm を用いているので、日本語訳で「蛆虫」で統一訳出すれば、その関連に気づく観客もいるだろう。[6]

5 鼠　mouse or rat

類義名詞の使い分けについて終わりに、4 回出てくる鼠 (mouse /rat) の比喩義について考える。2 幕で Hamlet が Claudius の兄弟殺しを確認するために旅役者に「ゴンザーゴ殺し」を演じさせるが、その劇の題を Claudius に聞かれた Hamlet は、企みを仄めかして挑発的に mousetrap と答え、叔父を mouse に見立てているが、1 幕 1 場の城壁の場面で歩哨 Francisco と Bernardo の確認挨拶 "Not a mouse stirring." が前置きとなっていると考えれば、二重の皮肉となろう。1 幕では、「鼠一匹出ない」の後で亡霊が出るという皮肉であったものが、2 幕になると鼠とは Claudius 王という

[6] 筆者は「良心の呵責」という意味で用いられてきた "worm of conscience" という表現の起源と継承について、中世宗教散文を主たるテキストとしてしばらく考察してきたが、まとまった段階で稿を改めて発表する。

わけだ。次いで第 3 幕、Hamlet は、母 Gertrude の寝室においてカーテンに隠れていた Polonius を刺し殺す前に rat と呼んだのは、潜むのが Claudius とみてそう呼びかけたならば mouse から rat への転換、それも統一メタファーとなるし、誰か分からぬ間諜の意味での rat ならば、それこそこの場に相応しい。

続く母への改悛を促す説教の中で「先夫の弟に不義の床 (sty 豚小屋) で可愛いネズミ (mouse) と呼ばれているのか」と詰ることにより、Claudius, Polonius, Gertrude 3 名が mouse / rat に比されていることになる。多くの動物表象が連続・錯綜して現れるこの劇で（2 幕 4 場では豚のイメージに鼠が続く）、この動物メタファーの皮肉な統一用法は注目すべきである。上演された劇を見ている観客は、この連続使用に気が付かないかもしれないが、脚本を何度か精読する読者には、意図的なメタファーの繰り返しと観取される。

以前数年をかけて、英語の諺と英詩、17 世紀から 19 世紀の辞書の記述を資料に、英語動物名の人間メタファー義を種ごとに分類し、歴史的なメタファー義の発達と継承の様を考察したが、日本語の「ネズミ」に相当する英語の rat と mouse のメタファー義は際立った対照があり、前者は「ならず者、密告者、裏切者」というネガティブな面を表し、後者には「臆病者、若い女、可愛い娘」という前者にない比喩義が顕著に存在することが分かった。[7] この比喩義の歴史的傾向から見ると、Gertrude が Claudius に mouse と呼ばれるのは（母を諭す Hamlet の想像ではあるが）「可愛いお前」の意味で endearment であろうが[8]、直前の場で Polonius が Hamlet に「裏切者・間諜」の意で rat と呼ばれていることを見れば、Claudius の Gertrude への mouse の呼びかけは観客には「お前も先夫を裏切った女だ」とのアイロニーを感じるかもしれない。そして Claudius、彼が mouse に比されているのは、デンマーク国、王家内に潜む他者、兄を殺した簒奪者と「ゴンザーゴ殺し」の「ネズミ捕り」で露見し、甥による復讐を極度に恐れている臆病者という解釈もできよう。

翻訳における問題もまた露呈した。英語原文の mouse と rat への松岡訳は、ネズミ（城壁）、ねずみ（観劇）、鼠（Polonius へ）、ネズミ（Hamlet が想像する Claudius の Gertrude への睦言）のヴァリエーション・文字の差が見えるが、これはメタファー義を反映したものなのだろうか。原文 rat に対してのみ漢字の鼠を当てている。注はない。他の *Hamlet* 日本語訳を見ても鼠、ねずみ、ネズミという表記に指示された人物やメタファー義の相違を反映させているものはなかった。[9]

6 camel, weasel, whale 再考[10]

最後に考察したいのは、一度しか現れない 3 つの動物名が連続する雲の場である（3 幕 2 場）。先行研究として諸校訂版での注釈と、この場面を特に論じた短い論文での動物名の解釈をまとめながら、筆者の見方を加え、終わりに自説を述べる。その前に指摘したいのは、本劇中で名詞 cloud(s) は 5 回出現し、最初に謁見の場での Claudius 王が甥で義理の息子となった Hamlet にかけた言葉に複数形で現れることだ。

How is it that the **clouds** still hang on you?　　（2 幕 1 場 66）

続いて、同じ Claudius 王が、長い発言の締め括りに即位を祝う夜通しの飲み会に言及して、自分が杯を飲み干すごとに大砲が雲に向けて放たれる、と述べる。

---

[7] 同様に日本語「鳩」には pigeon, dove が対応するが、後者の「夫婦愛・真の恋人・平和主義者」というポジティブなメタファー義と完全に対立する前者の「阿呆・カモ」の蔑義を踏まえずに「鳩」と訳出すれば、原文での意図は霧消するだろう。

[8] Israel Gollancz, ed. 1895. Temple Shakespeare, *Hamlet* の Glossary (p. 197) では *mouse* III. iv. 183 “a term of endearment” とあり、他の出現箇所への言及はない。The Larger Temple Shakespeare, *Hamlet* (1900) の Glossary も同様。

[9] 後掲の表 2 参照。

[10] ネット上で公開されている Shakespeare 研究者の Forum ともいうべき Shakesper: The Global electronic Shakespeare Conference では “Four Riddles in Hamlet” 中の 3 件に動物名が入っていること、この雲の場が挙げられていることを指摘しておく（1 hide Fox, and all other, 2. Camel, Weasel, Whale, 3. little more than kin, and less than kind, 4. I know a Hawk from a Handsaw）。

Why, 'tis a loving and a fair reply.
Be as ourself in Denmark. Madam, come.
This gentle and unforc'd accord of Hamlet
Sits smiling to my heart; in grace whereof,
No jocund health that Denmark drinks today
But the great cannon to the **clouds** shall tell,
And the King's rouse the heaven shall bruit again,
Re-speaking earthly thunder. Come away. （2 幕 1 場 121-128）

こうして、2 幕 1 場の「雲」の表象は、有名な 3 幕 2 場の雲の場の前置きとなっている。

Do you see yonder **cloud** that's almost in shape of a camel? （3 幕 2 場 366）

さらには、Hamlet に父 Polonius を殺されたと知ってフランスから帰国し、暴徒を率いて息巻く Laertes の行状を心配する Claudius が Leartes は「雲の中に籠っている」と述べること、これは *Hamlet* における周知の事実、Hamlet, Laertes, Fortinbras という 3 人の息子の共通性、親を殺されて復讐を目指す、のメタファー的証左でもある。

Last, and as much containing as all these,
Her brother is in secret come from France;
Feeds on his wonder, keeps, himself in **clouds**,
And wants not buzzers to infect his ear
With pestilent speeches of his father's death,
Wherein necessity, of matter beggar'd,
Will nothing stick our person to arraign
In ear and ear. （4 幕 5 場 87-94）

この部分の松岡和子訳は「猜疑心に凝り固まったまま身を潜めている」となって、原文 clouds の連続使用の意義は失われているのである。最後に clouds が現れるのは、その Laertes を王にと叫ぶ民衆の声が「雲まで鳴り響いている」という文句で、先の 2 幕での Claudius 新王祝賀の飲み会の砲声が」雲間に鳴り響くこととの対比であり、この 2 幕 1 場と 4 幕 5 場で名詞 clouds が近接して 2 度現れるのは偶然ではなく、1 度目が「ふさぎこむ」「身を隠す」というメタファー義、2 度目は「天に向かって」という同じ意味で、父を殺された二人の相似と相違の対照、Claudius に対しては痛烈な皮肉となっていることだ。

Save Yourself, my lord.
The ocean, overpeering of his list,
Eats not the flats with more impetuous haste
Than young Laertes, in a riotous head,
O'erbears your officers. The rabble call him lord,
And, as the world were now but to begin,
Antiquity forgot, custom not known—
The ratifiers and props of every word—
They cry 'Choose we! Laertes shall be king'
Caps, hands, and tongues applaud it to the **clouds**,
'Laertes shall be king, Laertes king' （4 幕 5 場 98-108）

ここを松岡は「「我々で選ぼう！レアティーズを王に」と叫んでおります。天にも届けと、帽子を投げ」と訳出しているので、またしても 2 幕から続くはずの名詞 cloud(s) の連続性は失われている。[11] Norman Blake は "As part of Shakespeare's habit of repetition it has been noted that he sometimes

[11] 日本語訳では 5 例を全て「雲」と訳出すべきだろう。松岡和子は雲の場の台詞 "Do you see yonder cloud that's almost in shape of a camel?" に「天井画を指して言っている」との注を加えている（p. 153）。Dover Wilson は当時の劇場に天井がなかったこと、役者が空の雲を指さして述べていた可能性を指摘する（378. *yonder cloud* Ham.

seizes on a particular word which he uses in one play."[12] と述べて、*King Lear* や *Much Ado about Nothing* における nothing の語意に注意するよう述べているが、先に見たように「蛆虫」を意味する maggot(s) と worm(s) は Polonius に向けて使われていた。名詞 cloud(s) も複数形では Hamlet と Leartes にのみに使われている。これを見逃しては以下の議論はできない。

では、数ある *Hamlet* 校訂本の注釈や先行論文でどのような解釈が見られるのか。古注で興味深かったのは Theobald で、weasel の代わりに Q3 に見える black から ouzle (oozel)「黒歌鳥=blackbird」を採り、これにより 3 つの動物名が "beast, bird, and fish" となるユーモアだとする。この説に同意する現代の校訂者は皆無であるが、ouzel であるとしたら、筆者は "fish, flesh, or fowl"「得体のしれない・日和見主義の人」の頭韻句での 3 分類の如く、 "camel, weasel, whale" は語尾の子音韻 (consonance) を用いた言葉遊びであるととる。いずれの解釈を取る場合も、Hamlet の言葉を肯定するだけの「日和見主義の人」の Polonius に対する皮肉であろうし、「雲の形」が見る人によって異なることをも示し、現実を理解しえない人間への嗟嘆ともなろう。

Roger J. Trienens, "The Symbolic Cloud in *Hamlet*" (1954) の先行論考のまとめによれば、まず、従来広く受け入れられ来た解釈に、これら 3 つの動物名は、camel が好色、weasel が狡賢、whale が大酒呑みのメタファーとなって Polonius への皮肉・当てつけとなっていること、次いで Harold Goddard 説 (1951) が紹介され、この動物名は Polonius ではなく Hamlet 自身の劇中での状況変化を象徴するもの、つまり、駱駝は復讐の義務の重圧にあえぐ（1-2 幕）、鼬は狡賢く立ち回る、意志と怒り（3 幕）、そして鯨が大海（a sea of troubles）に挑んで自身が飲み込まれる最期（5 幕）を象徴するものだという。これらの説を紹介して Trienens 自身が主張するのは、3 種の動物名は全て好色の象徴であり（"the three creatures which Hamlet sees in the cloud all connote lust." p. 211）、父の死から間もない母の叔父との結婚を責めるものとするのだ。この解釈は、この雲の場面がゴンザーゴ殺しの劇中劇の後、そして母の寝室へ向かう直前に起きていること、Claudius と Gertrude の「不義」の結婚、それが二人の好色によると悩む Hamlet の心中を示し、次の場、王妃の寝室で Hamlet が Gertrude を諫める内容を先行示唆するものだとする。そして、中世の動物伝説と Shakespeare の他の戯曲でのメタファー義により、3 種の動物が好色を表し、かつ鯨が前 2 者よりも強くその意味で使われていると主張する（the whale which Hamlet sees in the cloud should suggest lust even more strongly than the camel or the weasel. p. 213）

以上四様、それぞれ筋の通った解釈であり、新たな解釈は何も出せそうに思えなかったが、筆者は昔からこの 3 つの動物名が –(e)l で脚韻・子音韻を構成しており、類音効果で観客を笑わせたと想像していた。John Frow (2019, p. 370) も、雲自身の形態の変異の様をロマン派が言語表現で表現していたこととの関連で、"when Hamlet is mocking Polonius about what he can see in the shapes of clouds, the shift from "camel" to "weasel" repeats the /el/ phoneme, and then from "weasel" to "whale" repeats the initial /w/" と述べて、このセリフに見られる類音連鎖の交代を指摘しているが、動物名の含意に関しては沈黙している。

Trienes の説に基づいて、3 つの動物名が「好色・淫蕩」のイメージを重ねて強調しているとしても、一つの雲の形が、つまり同じ事態が見方ではいかようにも異なって見えることを示している、つまり人の観察は真実を捉えられないことを意味しているともとれる。これは Polonius 自身が旅回りの役者たちの演ずる劇が悲劇か喜劇か悲喜劇か、とどうにでも取れると発言することとも呼応する。

また、人間は自分を見ることはできないことを、この劇では 3 幕の鏡の喩えで示している。「ハムレットの鏡」という論考で野島秀勝氏は

> ハムレットも母の堕落以後、「なにもかも二重に見えてしまう」「奇妙な遠近法」の捕囚とな

Speaks in the royal palace, but also in the unlocalized Eliz. theatre open to sky; thus he can point upwards to a cloud or to 'this brave o'erhanging firmament (2. 2. 304) , and the audience is conscious of no incongruity.(p. 208)）。これらの役者の動作への指摘は興味深く、後の議論への示唆を得た。

[12] Blake 1989. p. 50.

る。彼の目には雲はラクダにもイタチにも鯨にも見える（三幕二場）。[13]

とハムレット自身の視覚の定めなさと解釈している。本劇の鏡 (mirror, (looking) glass) の譬えと Sonnets の鏡のモチーフを比較考察するのは、本論集の冒頭論文の大森文子教授で、“You are you” “You are yourself” のような主語と補語や主語と目的語に同一人物を指す文型、「文法的鏡面構造」の多出と関連付けている。同じ言葉を繋辞を挟んで左右に配置するような文型が鏡のメタファーとなっているという観点から *Hamlet* を見ると、王子 Hamlet の矛盾する 3 個の言葉を繰り返して、御機嫌を取ろうとする臣下とのやりとりも鏡面的対話と言えよう。これは有名な雲の場面 3 幕 2 場の Polonius との対話、5 幕 2 場の Osric とのやりとりに見られる。注目すべきは後者に出現する “as ’twere” と前者における almost like, like, very like という変異の繰り返しである。この“as ’twere” の *Hamlet* における繰り返しについて Allison K. Deutermann の指摘は傾聴に値するので、長いがここに引用したい。

> From camel to weasel to whale, Polonius dutifully sounds out the word Hamlet breathes into his ears. Later, the prince similarly sounds out the courtier Osric, perversely responding to his “it is very hot” with “No ’tis very cold.” Osric agrees (“It is indifferent cold, my lord, indeed”) only to be contradicted again (“it is very sultry and hot”). Once more, the courtier adjusts his weather report accordingly: “Exceedingly, my Lord, it is very sultry” (5.2.80-86). In their desire to please the prince, both Polonius and Osric seem to relinquish control of their sensory perception and their bodies more generally, allowing themselves to become Hamlet's instruments. And yet, of course, it is not their sensory perception that has changed but rather their accounts of it. The exchanges display Hamlet's power over these men and Guildenstern's comparable powerlessness over the prince; though the King’s counselor, Polonius is nonetheless subservient to Hamlet and can therefore be forced, like Osric, to discourse according to his suggestions. Such pliant receptivity is at least in part an occupational hazard. Hamlet is aware of the conditions that have shaped Polonius and Osric’s deferential reception. Still, he mistakenly assumes that how people hear will always inevitably, consistently, and predictably be predetermined by rank or, occasionally, by other factors, such as guilt or innocence. His application of these assumptions to the reception of theatrical speeches, I will show, tests their validity while extending Hamlet's interest in audition offstage.
>
> (Allison Deutermann, ““Caviare to the general”?: Taste, Hearing, and Genre in *Hamlet*” p. 245)

ここまで先行研究での様々な解釈を挙げながら、それらに対して筆者の考察を付加してきたが、最後に自説を述べたい。先に全 5 例の出現状況を見た名詞 cloud(s) では、雲の場に出る cloud が他の 4 例と異なり単数形であること、そして Claudius 王の名前と類音であること、その Claudius 王の台詞（1 幕 2 場）で clouds という名詞が本劇で初めて用いられたことから、“Do you see yonder **cloud** that’s almost in shape of a camel?” 以下の動物名は、Claudius 王の不徳をあげつらうメタファーではないかという仮説を得た。[14]　これを前提としての動物名の比喩義のありようをもう一度文脈から見てみれば、従来の説の一つ「3 つの動物名は雲の形に事寄せた Polonius への批判・皮肉」を、そっくりそのまま、兄王妃と即座に再婚するという好色で（camel）、兄を毒殺するように狡賢で（weasel）、即位の晩に新王として大酒を呑む（whale）というメタファーとなって叔父 Claudius 王への皮肉・当てつけと容易に解釈されるのである。特に whale が「大酒呑み」の蔑義で Claudius 批判として用いられているならば、1 幕 4 場、城壁で深夜の砲声を聞いた Hamlet がデンマーク人が大酒のみであると外国から馬鹿にされていると嘆くこととも結びつく。

3 幕 3 場で Claudius 王は、初め Guildenstan と Rosencranz、次いで Polonius と対話しており、Polonius 退場後に、入れ替わりに Hamlet が入ってくる。3 幕 2 場の雲の場の前は、ゴンザーゴ殺しの劇が上演されており、王家の人々と Polonius や Ophelia が Claudius と言葉を交わしている。前後で舞台にずっと出ている Claudius は雲の場の間は舞台の袖付近にいるはずだ。ので、これは Hamlet の問い “Do you see yonder cloud” の表意「あそこに見える雲」が「向こうにいる王 Claudius」「お前がさっき話していた王 Claudius」という裏の意味を含むという解釈を許すだろう。

---

[13] 野島秀勝　1998.「ハムレットの鏡」『ハムレット読本』 p. 16.

[14] 人名 Claudius と cloud の類音性は科研共同研究者の大森文子教授より示唆された。

ここからさらに後の場を見れば、本論 5 節で見た「鼠」と日本語訳出される名詞 rat が 3 幕 4 場に出ていることが面白い。王妃の居室に Hamlet が入った直後に、盗み聞きのためにカーテンに隠れていた Polonius は、これを叔父 Claudius と勘違いした Hamlet に刺殺される。この時の "How now! A rat?" 「何だ鼠か」という Hamlet の台詞は、「密告者・スパイ」の意味では Polonius に相応しいが、「ならず者・卑劣漢」の蔑義であれば、camel, weasel, whale から続く、動物メタファーで叔父 Claudius への罵倒となるのだ。

Hamlet は独白部でも母 Gertrude への諫めの言葉でも、Claudius への軽蔑・憎しみを激しい侮蔑語の列挙で表している。「鳩」の節での引用部を繰り返す。

> But I am pigeon-liver'd and lack gall
> To make oppression bitter, or ere this
> I should ha' fatted all the region kites
> With this **slave's** offal. Bloody bawdy **villain**!
> Remorseless, treacherous, lecherous, kindless **villain**!
> （2 幕 2 場 572-577）

ここでは Claudius を名詞 slave と villain で罵倒し、villain には bloody, bawdy, remorseless, treacherous, lecherous, kindless と罵倒形容詞を列挙しなければ気が済まない。母への諫言では murderer が加わって、「偽物の王」の意味の表現を繰り返す饒舌な息子である。

> A **murderer** and a **villain**!
> A **slave** that is not twentieth part the tithe
> Of your precedent lord, **a vice of kings**;
> **A cutpurse of the empire and the rule**,
> That from a shelf the precious diadem stole
> And put it in his pocket—
> …..
> **A king of shreds and patches**—　　（3 幕 4 場 96-102）

Claudius の獣への喩えは、早くも 1 幕 2 場の独白中で父と叔父を比較した「太陽神とけだもの」（松岡訳）に端を発する。[15]

> So excellent a king, that was to this
> Hyperion to a satyr;　　（1 幕 2 場 139-140）

ギリシア神話のサチュロスは半人半馬で酒飲み騒ぎ好色とされる半獣神である。3 幕 3 場で Hamlet は一人で祈りをささげている Claudius を見て殺害を思い、躊躇って止めたのであるが、3 幕 4 場、母の居室のカーテンに隠れる Polonius を Claudius と間違えて、rat と呼んで刺し殺した。先王 Hamlet に続き新王 Claudius の忠臣？となった「饒舌の」Polonius は、死ぬ前に同じく「饒舌の」Hamlet から Claudius の正体を動物名侮蔑メタファー列挙 "camel, weasel, whale and rat" で聞かされたというわけである。

---

[15] 父王 Hamlet が Hyperion に喩えられているのは、Claudius に son と呼ばれ clouds の中にいるのか？と問われた Hamlet が son と sun の掛詞で返したことと結びつくだろう。自分が sun(son)なら本当の父は Hyperion であると。ギリシア神話では Hyperion は日の神 Helios、月の神 Selene、夜明けの神 Eos の親とされているのであるから。

ハムレットの「鳩」pigeon-liver'd/dove 日本語対照　訳語に差はない

訳者	2 幕 2 場 pigeon-liver'd	5 幕 1 場 dove
坪内逍遥	成程、俺は臆病者で、虐げられても腹を立つだけの意気地さへも無いに相違ない。（鳩を出さない）	やがては母鳩が黄金色の雛を孵した時のやうに、おしだまって鎮静らうわいの。
福田恒存	鳩のように気の弱い腑ぬけでもなければ、いつまでこんな辛い我慢をするものか。	まるで牝鳩が金色の雛を孵すときのように、じっと黙りこくってしまう。
大山俊一	鳩のようにおとなしく、気が弱いのだ。	ちょうど雌鳩が金色のひなをじっと辛抱して抱いているときのように静まってあの子は黙ってしまいます。
木下順二	鳩のように心弱く勇気がないからここまで重荷に悩んでしまう。	でもじきにうなだれて黙ってしまいます。黄色い雛をかえす時の雌鳩のように。
久米正雄	成程私は鳩のやうに、圧制を受けても怒るだけの意気地がない。	やがては母鳩が黄金の雛を孵した時と同じやうに、黙って面伏せくなるだらうよ。
本田顕彰	おれが鳩みたいに優しく意気地なしで、圧迫を受けても腹を立てることも出来ないのは、本当のことなんだ。	すぐ、二羽の黄金色の雛が孵った時の雌鳩のやうにおとなしく、黙って考へ込むでせう。
横山有策	おれは鳩のような臆病もの、暴君に苦いめ見せるだけの胆汁が足りない男なのだ。	やがて、母鳩が黄金色の対の雛を孵した時のやう、彼の沈黙が静かに彼に戻って来よう。
永川玲二	なにしろおれの肝っ玉は鳩同然、迫害されて煮えたぎる血が一滴でもおれにあれば、この界隈のとんびはもう。。。	金色の雛をかえそうと卵を抱いている牝鳩のように、じっとうなだれてしまいます。
小田島雄志	鳩のように気弱で、屈辱を苦々しいと思う勇気さえ欠けているのだ。	金色の雛がかえったときの雌鳩のように、黙りこくってしまいます。
松岡和子	俺は鳩みたいに意気地がなく、	金色の双子の雛をかえそうとじっと卵を暖めている母鳩のように黙って坐り込んでしまうから
大場建治	きっとおれは鳩のように臆病で、怒りの感情に欠けているのだ。	（Claudius の台詞とする）だがすぐに黙りこくってうなだれてしまうからな、鳩が卵を抱いて二羽の黄金色の雛を孵すときのように。

ハムレットの「蛆虫」worm/maggot 日本語訳対照　訳語の差はない

訳者	2 幕 2 場 maggots	4 幕 3 場 politic **worms**; Your **worm**; **maggots**	5 幕 1 場 my Lady **Worm**
坪内逍遥	天日の浄き光とても。。。狗児の屍に蛆を醸す	さる蛆虫共が談合会を始めて、今ちょうど宴会じゃ。や、蛆というふやつは、ほんに会席の王さまぢゃ。。。さて其肥った果が蛆虫の餌食ぢゃ。	しかるに今は只蛆虫の天侍の所有。
福田恒存	日の御子。。。犬の屍に蛆をばわかしたまえば	政治屋の蛆虫どもが集まって、あの男の腹に総がかり。。。蛆虫というやつは食いしん坊の大関だからな。。。それで太ったわが身を蛆虫どもに提供するというわけだ	それが、今では蛆虫の思いもの。
大山俊一	もし太陽が犬の死骸に蛆をわかせるなら	蛆虫どもがうようよとあの御仁を取り巻いて、今や汚らわしい政治集会の真っ最中というところだな。。。あなたのような国王をも食べてしまう蛆虫は、さしずめ食事の帝王だと言える。。。そしてわれわれがわれわれ自身を肥らすのは蛆虫を肥らすため。	そして今は完全に蛆虫姫の想いものだ。
木下順二	太陽が犬の死骸に蛆虫をわかせるとすれば	政治屋の蛆虫がちょうど今あの男にたかっているところです。蛆虫というのは食うことにかけては王さまだ。。。そして肥らせた自分を蛆虫に食わせる。	それが今は蛆虫夫人のお気に入りか。
久米正雄	天日とても。。。死狗の屍に蛆をも湧かすべければ	ある蛆虫の会合が今ちょうど彼の処で宴席を初めたのです。あの蛆虫といへばほんとに会議の王ですよ。。。そして蛆虫のために吾々を肥らすのです。	しかるに今は蛆虫婦人の持ちもの。
本田顕彰	もし太陽が犬の死骸で蛆を育てるなら	政治屋につく蛆虫どもの集会が、彼を食べてゐるところです。蛆虫という奴は会食の唯一の皇帝です。。。今度は蛆のために自分を太らせるからです。	今はといふに、蛆夫人のものだ。
横山有策	若しそれ太陽が犬の屍に蛆虫を発生せしむれば	政治家気取りの蛆虫が寄り集まって、今宴会を開いてゐます。あの蛆虫という奴は宴席の帝王です。。。今度は蛆のために自分を太らせるからです。	で今では、蛆虫姫の家来。
永川玲二	何しろ太陽は犬の死体に蛆をわかす	政治好きの蛆虫どもが寄ってたかって食いものにしてる。なにしろつまみ食いにかけて蛆虫は天下無敵、。。。肥った自分を蛆虫に食ってもらう。	今はもっぱら蛆虫夫人のご寵愛。
小田島雄志	太陽が犬の死骸に蛆虫をわかすは	政治屋の蛆虫どもがよってたかってあの男を食いものにしております。。。そして太らせた自分を蛆虫に食わせる。。。王様を食った蛆虫を餌にして魚を釣り、	それがいま蛆虫婦人のしもべだ。
松岡和子	もしも太陽が犬の死体にウジをわかすなら	政治屋の蛆虫どもが寄ってたかってあの男を平らげています。。。王を食った蛆虫を餌に魚を釣り、その蛆を食った魚を人が食うかもしれない	それが今では蛆虫夫人の所有物だ。

大場建治	太陽たる王子は犬の死骸を照らして蛆をわかす	抜け目ない政治家の蛆虫どもがただいま会食のまっ最中。なにしろ蛆虫ってやつは。。。だが自分を太らせるのは蛆虫のため。	それがいまは蛆虫夫人の囲いもの。

ハムレットの「鼠」mouse/rat 日本語訳対照

訳者	1 幕 1 場 mouse	3 幕 2 場 mousetrap	3 幕 4 場 rat	3 幕 4 場 mouse
坪内逍遥	鼠一疋出ませなんだ	鼠おとし	や！鼠？	いとしいの、可愛いのと甘ったるい言葉に誑されて
福田恒存	鼠一匹出なかった	わな。おおそのわけをとおっしゃる？	おお、さては！鼠か？	「ういやつ」とでもなんとでも言わせておけばいい
大山俊一	ねずみ一匹でなかった	「ねずみ取り」	なんということだ！ねずみか？	「かわいこちゃん」と呼んでもらい
木下順二	うん。鼠一匹。	「鼠おとし」	何だ！鼠か？	わが小鼠よといわせたらいい
久米正雄	鼠一匹騒ぎませぬ	鼠罠	どうしたと。鼠だな。	可愛い者と呼ばれたり
本田顕彰	鼠一匹動いちゃゐない	「ねずみおとし。」	なんだ！鼠か？	可愛い鼠さんと呼んでもらったり
横山有策	鼠一匹騒ぎません	『捕鼠機（ねずみとり）』	何ッ！鼠か？	「わしの小鼠」などゝ呼ばれたり
永川玲二	ねずみ一匹現われん	「ねずみ取り」	なんだ、ねずみか？	かわいいとささやかれたり
小田島雄志	ネズ一匹	『ネズミ取り』	おお、ネズミか？	かわいい子ネズミとでも呼ばれるがいい
松岡和子	ネズミ一匹出なかった	「ねずみ取り」	何だ？鼠か！	ネズミちゃんと呼ばれ
大場建治	鼠一匹出なかった	「鼠とり」	なに、鼠か？	睦言はかわいいねずみちゃん

参考文献

ジャン＝ポール・クレベール著　1989. 竹内信夫他訳『動物シンボル事典』大修館書店

大森文子，2006.「動物比喩に表れる獣性と人間性　共同研究英語動物名のメタファー(5)」『詩的言語とメタファー　言語文化共同研究プロジェクト 2005』47-60.

-----, 2018a.「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の Sonnets をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース（言語文化共同研究プロジェクト 2017）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.

------, 2018b.「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究１』（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編）東京：ひつじ書房、175-104.

------, 2021.「Shakespeare の Sonnets における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.

------, 2022.「時のメタファーとシェイクスピア」『英語のレトリック・日本語のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2021）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、17-29.

笹山隆編　1998.『ハムレット読本』岩波書店

野島秀勝　1998.「ハムレットの鏡」『ハムレット読本』 pp. 3-26.（初出『英語青年』1984 年 1～2 月号　研究社出版）

渡辺秀樹 2006.「イヌ科の動物名の人間比喩の意味範囲と構造　共同研究英語動物名のメタファー(4)」『詩的言語とメタファー　言語文化共同研究プロジェクト 2005』35-46.

-----, 2007 「メディア英語の犬品種名メタファー　poodle と rottweiler を中心に：　共同研究　英語動物名のメタファー (7)」 『詩的言語とメタファー　言語文化共同研究プロジェクト 2006』. 31-45.

-----, 2008.「イヌ科名詞・派生語の人間比喩のレベルと構造　共同研究　英語動物名のメタファー(8)」『言語文化研究』34: 93-108.

-----, 2009.「名詞 cat を含む諺・成句・イディオムと人間比喩義の構造　共同研究　英語動物名のメタファー（10）」『言語の歴史的変化と認知の枠組み　言語文化共同研究プロジェクト 2008』大阪大学 5-21.

-----, 2011.「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック動物名人間比喩用法の対義・類義の構造」『文化とレトリック認識　言語文化共同研究プロジェクト 2010』大阪大学 1-20.

-----, 2019.「英詩感情語メタファーの系譜第2回　シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.
------, 2021.「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when~then~” の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13.
------, 2022.「Shakespeareにおける時の擬人化のヴァリエーション：英国16〜17世紀詞華集を基礎資料にした Time の epithets と apostrophes 再考」『英語のレトリック・日本語のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2021）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、3-15.

日本語訳
松岡和子訳 1996.『ハムレット　シェイクスピア全集 1』筑摩書房.
大場建治対訳・注解 2004.『ハムレット　対訳・註解　研究社シェイクスピア選集』研究社

Hamlet 校訂注釈本
Furness, Horae Howard, ed. 1963. *Hamlet: A New variorum Edition of Shakespeare*. Volume I. Dover Publications, Inc. New York.
Gollancz, Israel, ed., 1919. *Shakespeare's Tragedy of Hamlet.* The Temple Shakespeare. London: J. M. Dent & Sons.
-----, ed., 1900.*The Works of Shakespeare, Volume X. The Tragedy of Macbeth, The Tragedy of Hamlet, & The Tragedy of King Lear.* The Larger Temple Shakespeare. London: J. M. Dent & Sons.
Jenkins, Harold, ed., 1982. *Hamlet*. The Arden Shakespeare. Methuen & Co, Ltd.
Wilson, John Dover, ed.,1936. *Hamlet* (The New Shakespeare). Cambridge: Cambridge University Press

Blake, Norman, F., 1989. *The Language of Shakespeare*. The Language of Literature. Macmillan.
Boehrer, Bruce, 2007. *In the Renaissance: A Cultural History of Animals.* Vol. 3. Berg.
-----, 2002. *Shakespeare Among the Animals: Nature and Society in the Drama of Early Modern England*. (Early Modern Cultural Studies 1500–1700) Palgrave Macmillan.
Cheney, David R., 1959. “The Meaning of the Cloud in Hamlet” *Shakespeare Quarterly,* Vol. 10, pp. 446-447.
Deutermann, Allison K., 2011. ““Caviare to the general”?: Taste, Hearing, and Genre in Hamlet” p. 245
Frow, John, 2019. “On the Modifications of Clouds” *Symploke*: Lincoln 27, 1-2, pp. 369-373. University of Nebraska Press. (p. 90-91 Camel)
Garber, Marjorie, 2021. “As ’Twere; or Misrecognition,” *Raritan*; New Brunswick 41, 1: 96-120. Rutgers University.
Goddard, Harold, 1951.*The Meaning of Shakespeare*. Chicago, pp. 357 and 374.
Phipson, Emma, 2014. *The Animal-Lore of Shakespeare's Time Including Quadrupeds, Birds, Reptiles, Fish and Insects*. Cambridge University Press. (Digitally Printed Version of 1883)
Raber Karen and Dugan, Holly, 2020. *The Routledge Handbook of Shakespeare and Animals* (Routledge Literature Handbooks) (English Edition)
Raber, Karen and Edwards, Karen, 2022. *Shakespeare and Animals; A Dictionary*. The Arden Shakespeare.(pp. 90-91 Camel)
Spurgeon, Caroline, F. E., 1966. *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*. Cambridge University Press.
Trienens, Roger J., 1954. “The Symbolic Cloud in *Hamlet*,” *Shakespeare Quarterly,* Vol. 5, pp. 211-13.

電子版
シェイクスピア大全 CD-ROM 版　2003. 新潮社
Arden Shakespeare CD-ROM: Text and Sources for Shakespeare Studies. 1997. Thomas Nelson.
OpenSource *Shakespeare*. (https://www.opensourceshakespeare.org)